

〈近代本論第十四回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1792 ロシア遣日使節アダム・ラクスマン、漂流民大黒屋光太夫（1751～1828→『北槎聞略』1794）を同伴して根室に来航、老中松平定信は通商を約した
- 1804 ニコライ・レザノフ長崎来航、幕府通商拒否（定信は既に失脚）
- 1807 アメリカのハドソン川にて、外輪式蒸気船クラームント号の進水式成功（商用蒸気船の本格化）
- 1808 イギリス軍艦フェートン号、長崎出島に侵入（フェートン号事件）
- 1825 異国船打払令
- 1839 〈蛮社の獄〉 渡辺崋山、高野長英の死
- 1840～42 アヘン戦争（→南京条約）
- 1845頃 英国海軍で外輪式からスクリュウ型蒸気船への転換が始まる
- 1853（7月8日）海軍提督マシュー・ペリー率いるアメリカ海軍東インド艦隊（二隻の外輪式蒸気船、二隻の帆船）が浦賀に来航。江戸湾に侵入して威嚇測量を繰り返す。フィルモア大統領の親書を渡してひとまず去った。
- 1854（2月11日）ペリー再来航（蒸気船三隻、帆船三隻）、一年後の再来航の約束を破り、半年にしたのも威嚇のためであった。
- 1854（3月31日）日米和親条約（神奈川条約）締結、6月、下田条約（和親条約の細則）締結、下田、箱館（函館）の開港、鎖国の終焉。この時点では通商は拒否し、開港のみだった
- 1856（6月28日）アロー号事件、後に駐日英国公使となるハリー・パークス（1828～85）は広東領事として事件に関与した
- 1856（8月）タウンゼント・ハリス、アメリカ公使として下田に着任、通商条約の交渉を老中阿部正弘と行う
- 1856～69 アロー戦争＝第二次アヘン戦争（→天津条約）
- 1857（八月）老中首座阿部正弘急死、堀田正睦老中首座に、条約勅許運動開始
- 1857（12月）ハリス江戸入府、江戸城登城
- 1858（4月）堀田正睦、条約勅許獲得に失敗、失脚。井伊直弼大老となる。勅許なしの条約締結に踏み切る

- 1858 (6月19日) 日米修好通商条約締結 領事裁判権 (治外法権)、関税自主権の剥奪 (段階的に行われた)、片務的最恵国待遇 (これも事後的に確定) 等、やや曖昧な形で出発したものの、典型的な不平等条約として定着した
- 1858 (7月10日) 日蘭修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月11日) 日露修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月18日) 日英修好通商条約、不平等条約
- 1858 (9月3日) 日仏修好通商条約、不平等条約、以上 (安政五カ国条約)
- 1858～59 安政の大獄 (吉田松陰、橋本左内他斬罪刑死)
- 1860 日本の蒸気船軍艦咸臨丸渡米 (勝海舟、福沢諭吉) 咸臨丸は幕府の発注でオランダの造船所で造られた。外輪式ではなく、すでにスクリュー式だが、練習船規模で、蒸気は港湾の出入りの時にのみ用いられた
- 1860 桜田門外の変 井伊大老暗殺
- 1859 英国公使ラザフォード・オールコック着任 (～1865)
- 1862 (9月) 生麦事件、島津久光の行列 (久光は藩主の父) に乱入した英国人一行殺傷される (→薩英戦争)
- 1863 (8月) 薩英戦争、鹿児島 の城下町の一割が焼失したが、英国側も三隻の軍艦が損傷を受けた。斉彬以来の軍制近代化が一定の戦果をおさめたと言える。この衝突以降、薩英は急速に接近する。
- 1863～64 下関戦争 (馬関戦争)、長州藩の攘夷令実行に列強艦隊が反撃、長州側はほとんどすべての砲台を破壊され、莫大な賠償金を課せられた (→奇兵隊の結成=近代的国民兵制度の開始)。長州は幕府の攘夷令に従っただけだと主張したため、幕府がその賠償金を肩代わりし、後に明治政府によって完済された。
- 1864 仏国大使レオン・ロッシュ着任 (～1868)
- 1865 英国大使ハリー・パークス着任 (～1883)
- 1867 (10月) 大政奉還
- 1867 (12月9日) 王政復古
- 1868 (1月) 鳥羽伏見の戦い
- 1868～69 戊辰戦争
- 1868 (3月) 五箇条の誓文

2. 〈文明化イデオロギー〉の実践形態としての〈軍艦外交〉

- 〈文明化〉とは端的に植民地化であり、その導入部が〈軍艦外交〉であった
- 彼我の軍事的実力差による威嚇、隷属の強要
- それがどうして〈文明化〉なのか?
- 〈文明主体であるわれわれ〉と〈文明客体である彼ら〉の分岐弁別
- 〈革命〉における党派の力学が準備 (革命派⇔反・革命派)
- 人間的普遍の破壊 → 党派イデオロギーの登場、席卷

- ヘーゲルの〈自由なわれわれ（ヨーロッパ人）〉の〈世界史〉パラダイムにより完成（進化論的生物主義との融合 → 人種論の「根拠」に）
- 外交の核心部である国際貿易の互惠性のルール、〈万国公法〉そのものがダブル・スタンダード化した（ → 木戸たちの鬱屈）
- 結果としての治外法権、関税自主権の剥奪 = 不平等条約
- 東アジアにおける〈軍艦外交＝植民地化の前哨〉の系譜
 - ① アヘン戦争
 - ② 黒船
 - ③ アロー戦争（→日米修好通商条約締結）
- 日本近代の外的淵源としての〈黒船〉は、〈外圧〉としてわれわれの近代観の基底部に埋め込まれた
- それに対する主体的対応が国家統一を可能にした
- 境界現象としての日本近代の位置
 - = 植民地化を免れた非・ヨーロッパ集団として、唯一自立的な近代の造形に成功した

3. 黒船来航の背景

- 1807 商用外輪式蒸気船の実用化（アメリカ、ハドソン川にて）
- 1845頃 英国海軍にて外輪式のスクリュー式への転換
- 1860頃 鉄造軍艦の開始（英国海軍）

4. 〈軍艦外交〉（Gunboat Diplomacy）の定型確立

- アヘン戦争（1840～42）、アロー戦争（1856～60）
- 蒸気船軍艦の威嚇的、実戦的活用の開始
- ペリー提督、ハリス公使の踏襲

5. 〈文明化〉の使命感（ペリー、ハリス）

- 〈断固たる態度〉 = 〈軍艦外交〉による威嚇（引用1）
- 〈威力偵察〉（無断測量）と偶発的事件への期待（引用2）
- ハリスも偶発事が〈大問題〉になると威嚇した（引用3）
- 閣老たちは、京都の攘夷派と戦うよりは、外国との戦争のほうがましだと応えた（当時の開国攘夷の対立の背景を示している）

引用1

〈日本政府に対して断固たる態度を執ることが提督（※ペリー）の方針だった。……なぜならば、この方針こそは、彼に託された微妙な使命に対する成功を保証してくれる、最善のものだと信じたからだった。彼は従来同じ使命を帯びて日本を訪問した他の人たちとは、まったく異なった方針を採ろうと決心したのであった。すなわち、一文明国が、他の

文明国に対してとるべき儀礼的な態度を当然のこととして要求しようとしたのである。) (マシュー・ペリー『日本遠征記』、2-191p)

引用2

〈武力に訴えての上陸の問題は、事件の今後の発展によって決定されるものであった。これはもちろん、採られうる最後の手段であったし、また最後であることが望ましかった。しかし提督は、最悪の場合を予想して、艦隊に対して絶えず完全な準備をさせておき、戦争中とまったく同様に、乗組員を徹底的に訓練した。もし日本人が見識ぶってお高くとまっているならば、面白い勝負だった。けだし他の国民もまた誇りを有しているのであって、その誇りをいかに守るべきかを知っているということ、また日本人がわれわれよりも優越しているとは認めないということ、日本人に知らしめるのは結構なことであった。〉(同上)

引用3

〈かかる非人道的行為に対して、アメリカ人は激昂し、その処置について大いに強硬な、そして出来るだけ誇張した申し立て(!)をするであろう。その陳述書は公使のもとへ(※わたしハリスのもとへ)、更にその写しは合衆国へ送られるであろう。このために、両国間に一大紛争が巻き起こるかもしれない。〉(タウンゼント・ハリス『日本滞在記』、下148p)

6. 〈治外法権〉と〈偶発事〉の期待値

- 生麦事件(1862年) → 薩英戦争(1863年)、下関戦争(1863~64年)による「実証」
- 賠償金と関税率を天秤にかける、やり手の外交官たち(引用4)
- 列強の「互惠的通商」の本音が透けて見える
- ハリスは〈治外法権〉の条項(領事裁判権)を幕府側があっさり承諾したことには驚いた(沈黙して驚き、歓びは漏らさなかった)(引用5)
- この承諾を家康以来の〈旧法〉だったからとするのはまったくの誤りである
- 〈鎖国〉による対外外交の折衝能力の欠落が原因
- 治外法権が列強の常識でなければ、生麦事件は封建慣習法で処理されていた
- 刑制の格差が、「文明差」として前提されていることから、治外法権は「文明的に」正当化されていた
- 最大の問題はそれが在留の「自国民保護」の論理へと拡張されることにある
- 植民地化が治外法権に対する〈難癖〉から始まることは、彼らの了解の彼方であった

- プーチンが〈自国民保護〉を自作自演しつつ、ウクライナに侵攻した、その〈論理〉も植民地化の定型であることに注意（力の論理と偽善のアマルガムは根強く残存する）

引用 4

〈氏（ウィンチェスター外交官）は、イギリス政府に対し、この際下関賠償金の一部を放棄すれば、その代わりとして文書による天皇の条約批准の約束と、輸入税率（※日本側の税率）を価格の五パーセントにまで一率に引き下げることが可能となるかもしれないとほのめかしたのである。〉（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』、常175 p）

引用 5

〈わたしの次の要求は、日本で罪を犯したアメリカ人は、領事の審理をうけ、もし有罪であるならば、アメリカの法律によって罰すべしというのであった。これはなんらの異議もなく同意されたが、わたしは、愉快になるとともに、実は大いに驚いたのである。〉（ハリス、同上、中—178 p）

7. 幕末の開港開国は〈軍艦外交〉の結果であり、それはすでに植民地化を内包するイデオロギー論理であった
 - これは志士たちにとっては常識だったが、近代史家の常識とはならなかった
 - ノーマンの例
 - 列強の植民地化が一時的に〈風の時代〉を迎え、それが幕末維新の幸運となったという主張（引用 6）
 - これは〈後知恵〉の総括であって、現実の歴史過程ではない
 - 現実の歴史過程は、強烈な〈軍艦外交〉の圧に曝されていた

引用 6

〈1850年からアメリカ南北戦争と普仏戦争の勃発にいたるまでの国際情勢の特殊な複雑さ、ならびに日本における英仏の陰謀の行き詰まり——それにもっとも重要なことは、イギリスの中国への没頭——は、日本がその国内経済を老朽化させ、外からの通商的、軍事的支配の危険にさらされた封建制度の束縛を払いのけるために、是非とも必要だった時間的余裕を与えた。たまたまこのような国際的勢力均衡が存在したことを認めるならば、清国という疲れ果て延びきった肉体が、ヨーロッパ列強の植民地的食欲から日本を守る楯となったことは、多言を要さない。〉（ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』第二章〈明治維新の背景〉、77 p f）

8. 日本の植民地化の予測 1

(ペリー)

- ペリーの〈軍艦外交〉は、競合するロシアの動きを強く意識していた
- その際、ペリーはロシアによる日本の植民地化が、ペリーの失敗につけこむ形で始まるだろうことを予測している（引用 7）

引用 7

〈ペリー提督は、1853年7月8日に、日本の商業中心地たる江戸の湾に投錨した。1853年8月22日には、プチャーチン大将の率いるロシア艦隊が、長崎港に投錨した。……もしペリー提督が不幸にも平和的企図に失敗して、日本と敵対することになれば、ロシアはその調停をするのではなく、ただちに日本の同盟者となり、日本に援助を与え、もしそれに成功したならば、適当な時期に日本全国を併呑しようとの意図を抱いていたのである。〉（ペリー、同上、1-170 p f）

9. 日本の植民地化の予測 2（オールコック）

- 最初の駐日英国大使オールコックは、回想録の序文で〈日本が滅びたあと〉の状態を思考実験している（引用 8）
- その根拠は英国と日本の裸形の国力差だった（そのみ）
- 〈文明化〉の露骨な内実、そのジンゴイズムと人種主義
- それが幕末維新のイデオロギー現実であったことを忘れないように

引用 8

〈十九世紀の人々は、「あきらかに高度の文明と、またはっきりと低次の文明が交錯しているばあい、劣勢民族の漸進的向上と、優勢民族の直接的な利益(!)とを融合させて、調和のうちに共存させることの困難さ」を熟知していると言われている。……二つの文明の(※ヨーロッパと日本の)相対的な価値ならびに地位がどのようなものであろうとも、われわれの方が強力な民族である、つまり科学や戦争のありとあらゆる手段や器具の面で強力であるということは、否定しがたい。ヨーロッパの外交政策は、敵対行為に出ることをもって国家の一大災禍とみなし、これを避けるためにあらゆる努力を払ってきた。だが、それにもかかわらず、そのような敵対行為に出る危険性はたえず存在していた。そして、かりにわれわれが日本に対して、そのような行為に出たならば、日本を打ち負かして滅ぼすであろうことは、ほとんど疑う余地がない。〉（ラザフォード・オールコック『大君の都』〈序文〉、上、38 p f）

10. ペリーの〈安政五カ国条約〉に対する深読み（引用 9）

- アメリカだけでなく、〈列強〉のすべてと同じ内容の条約を結んだ
(安政五カ国条約 = 米蘭露英仏)

- それは列強間の牽制を狙い、どれか一つの強国の植民地となることを避けるためである (!)

引用 9

〈彼らは (※日本人は) イギリスの提督スターリングが、日本付近に出没するロシアの戦艦を探索しているということをも知った。そこで日本人は、日本をいずれかの国によって侵略されないようにする手段として、また自らが希望する厳正中立を保ちうるための手段として、一層進んであらゆる国々と条約を結ぼうとしたのである。〉 (同上、1-173 p)

1 1. 植民地化のメカニズム

- 初代の駐日大使たちは、多くが植民地統治を経験した〈猛者〉たちだった
- パークスとロッシュの対立関係もその背景からくる (引用 10)
- 二人とも〈現地通訳〉あがりの植民地官僚
- アーネスト・サトウもその日本語の能力によって、候補の一人だったと言ってよい

引用 10

〈パークス公使とロッシュ公使はお互いに憎み合い、一人の男を争う二人の女のように嫉妬しあっていたと言っても言いすぎではない。〉 (A. B. ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』、18 p)

1 2. 維新幕末の真の幸運は、主体的大同団結の速さ、力にあった

- 列強間の競合は一時的なバランスを保った
- アメリカの南北戦争 (1861~65) はペリー、ハリスの始めた強圧的方向を鈍磨させた
- しかしそれは〈風〉ではない、メカニズムはすでに動き始めていた
- その圧力に対抗して、志士たちが大同団結に動いたことが、維新幕末の運命を主体的に決定した
- 薩土同盟、薩長同盟の実体性、有効性は、つねに列強の圧と不可分の関係にあった

1 3. しかし志士たちは〈文明化〉イデオロギーの内実を理解していたわけではない

- 大同団結は〈文明化〉のためではなく、統一国家構築のためだった
- それが結局、〈文明化〉(≡される側の植民地化) に対する最大の対抗策となった

- 幕末維新の近代国家草創と、列強の〈文明化〉圧力は、裸形の〈圧〉と〈反発〉としては弁証法的緊張関係にあったが、その内実はすれちがっていた
- すれちがいの原因は、〈文明化〉イデオロギーの契機である、〈革命〉、〈世界史〉、〈進化〉がこの時点ではほとんどまだ日本に知られていなかったことに起因する
- 蘭学のヨーロッパ受容は、個我の合理主義から体制への献策までであり、合理主義が集団の再編に向かう、フランス革命からの集団的定位の流れはその了解の彼方にあった
- 〈文明化〉と〈近代化〉の正しい弁別は、〈米欧回覧〉の時期に始まった

1 4. 〈軍艦外交〉における〈文明化〉イデオロギーの内実

- 〈使命感〉との融合
- 〈文明の利器〉に対する自尊的優越感
- 和親条約締結時の〈文明〉のすれちがい
- 相撲 ⇔ 電信機、鉄道模型
- 蘭学の蓄積により、〈文明〉側の期待の成果はあがらなかった（引用 1 1）

引用 1 1

〈アメリカ人は誇りを以て、力士たちの野蛮な技量の誇示に対し、電信機と鉄道模型を披露した。日本側の委員たち（※条約締結の閣老たち）を招待したのである。それは日本の役人が行った嫌悪すべき見せ物に対し、より高度な文明的な呈示であり、まことに愉快的対照をなすものであった。野蛮な動物的活力の見せ物の代わりに、半開の国民に対する科学と企業力の成果の勝利を啓示したのである。〉（ペリー、同上、3-230p）

1 5. 蘭学の蓄積 → 〈文明の利器〉（大砲、蒸気機関他）に対する耐性

- 浦賀奉行香山栄左衛門の余裕ある対応（引用 1 2）
- ハード面での適応力 ⇔ ソフト面での初歩性
- 咸臨丸で渡米した福沢諭吉の体験
- ソフト、イデオロギー面でのまったくの無知を諭吉は悟った
- 初期啓蒙活動の課題意識へ（『西洋事情』他）

引用 1 2

〈船室における小宴と談話が終わってから、栄左衛門とその通訳達は艦内の参観を勧められた。彼らは非常に懇懇にこの申し出を受け入れて甲板に出てくる。乗り組みの士官や水兵達は好奇心を抑えきれずに、ここかしこに群れ合っていたが、それを見ても日本人たちは片時たりとも沈着さを失うことなく、泰然自若として冷静な威厳ある態度を保っていた。彼らは艦内の各種の装備全体に対して理知的な興味を抱き、大砲を見ると、「ペーザ

ン型ですか」と正確に指摘する。彼らは完備した驚嘆すべき技術と機構を初めて見たにもかかわらず、そうした場合に期待されるような驚愕の態度を微塵も示さなかったのである。蒸気機関は彼らにとって明らかに大きい興味の対象であったが、通訳たちの言葉を聞いていると、彼らが機関の原理についてまったく無知ではないことが分かった。(ペリー、同上、2-222p)

16. 通商交渉に際しての〈国際貿易〉に対する無知

- ハリスの相手方である幕府の役人たちは、貿易の無知を正直に告白し、教を乞うた(引用13)
- ハリスは不平等条約の観念を彼らに一言も伝えることなく、不平等条約を結ぶ
- その際かれは、幕府および役人たちを〈病的な虚言癖がある面々〉だと断定している(後述)

引用13

〈接待委員(※条約交渉の接待役)たちは、また貿易について質問し、わたしの言う、役人の仲介なしに行われる貿易とはどういう意味のものかと質問した(※そういうものは、この時代、原理的に存在しないことに注意。密貿易は例外だが、密貿易はもちろん通商条約の対象とはなりえない)。これに関しても、わたしは説明して、十分に彼らを納得させることに成功した(※そういうものがたしかにあると説明した、つまり真っ赤な嘘)。彼らは、われわれ日本人はこうした問題に全く疎く、それゆえ、赤子のようなものである。だから貴殿はわれわれに対して辛抱強くしなければならぬと述べた。そしてわたしの陳述のすべてに対して、全幅の信頼を置くと付言した。〉(ハリス、下-98p)

17. ハリスの〈通商条約〉の重点

- 最重要課題は通貨の兌換率の決定だった
- ドル金貨と日本金貨の兌換を、手数料二十五パーセントから六パーセントに縮小することに成功
- 金銀の兌換律の日本と欧米の差異を見越しての交渉だった
- アメリカは金一に対して銀十六、日本は金一に対して四未満だった。同じ量の銀で五倍前後の金が手に入ることになる
- 同国人が彼に必要経費の金貨での支払いを求めると、彼はそれを「強欲」だと非難する(引用13)
- 結果として大量の金が海外に流出した
- それのみで、横浜の外国人は大尽暮らしができた(サトウの証言)
- すでに〈文明の利器〉の効果が薄いことを知ったハリスの上納品は、ケンペルたちの昔に戻っている(たんなる贅沢品の儀礼的贈答)(引用14)

引用13

〈ハル氏の極めて高い値段に対し、銀貨でわたしは支払う。これに対して、彼はわたしに金で支払うことを望んだ。それは日本のこの地にあるわたしに、75パーセントの損失をもたらすものである。なぜなら日本人の銀に対する金の割合は、一に対して三ヶ七分の一に過ぎないからである。一に対する十六がアメリカの相場であるが、こうしたことはいかにもニュー・イングランド人のやりそうなことである（※ハルはニュー・イングランド出身、ハリスはウェールズ系アメリカ人。）（ハリス、中208p）

引用14

〈1857年10月17日 わたしは江戸の将軍と閣老への贈り物として喜ばれそうなものを、わたしの所持品の中からいろいろと選んでいるところだ。

それらの品々は、シャンペン、シェリー酒、ワイン、甘露酒、チェリー・ブランデー、挿絵が沢山入った博物学の本、望遠鏡、晴雨計、美しいアストラル・ランプ、華麗なカットグラスの壺、砂糖煮の果物などである。〉（ハリス、同上、中一316p）

18. ハリスの〈文明化〉イデオロギーと〈軍艦〉なき〈軍艦外交〉

- 〈文明化〉の使命感（引用15）
- 〈軍艦外交〉との融合
- 〈軍艦〉なしの〈軍艦外交〉圧（引用16）
- 〈恐怖〉のモメントを強調（引用17）
- 〈危機〉の自己演出
- 交渉決裂ならば戦争だと最後通牒（引用18）
- 日本の迷夢を覚醒するための砲弾云々（引用19）
- 砲艦一隻の偶然の下田寄港を活用して江戸へ
- 交渉に際して、アロー号事件の恐怖を最大限に活用
= 軍艦なき軍艦外交（引用20）

引用15

〈1857年8月19日（※日本到着の前日） わたしは、日本に駐在すべき文明国からの最初の公認された代理人となるであろう。このことは、わたしの生涯に一つの画期を刻むとともに、日本における諸々の事物の新たな秩序の発端となるであろう。〉（ハリス、同上、上、エピグラム）

引用16

〈一八五七年四月二十五日 アームストロング提督がやってこないのはどうしたわけか、わたしにはわからない。わたしがもし一隻の軍艦を当所に有するならば、例の二つの

問題（※通貨問題と領事権）に関するわたしの要求に対して、急速な回答を期待しうるだろう。しかし軍艦がやってこない限り、問題が解決を見ないことは確実に思える。）（ハリス、同上、中232p）

引用17

〈一八五七年五月二日 一隻の軍艦がないことは、また日本人に対するわたしの威力を弱めがちである。日本人はいままで、恐怖なしにはなんらの譲歩もしていない。我々の将来の交渉のいかなる改善も、ただ我々に力の示威があつてこそ行われるのである。〉（同上、中243p）

引用18

〈一八五八年一月九日 わたしは一つの危機を引き起こしてやろうと決意した。……わたしに対する日本人の態度は、全権委員が艦隊を背景とし、日本人に対して議論の代わりに砲弾を見舞うことなしには、談判なるものが決して彼らとの間に行い得ないことを示すものだと言って、話を打ち切った。わたしは最後の言葉として、もしなんらかの手がうたれなければ、わたしは下田に帰るであろうと言った。……

これはわたしとしては明らかに大胆な措置ではあった。しかしこの国民についてのわたしの知識からして、この所為によって交渉をぶちこわしにする危険を冒してはいないことをわたしは知っていた。わたしが屈服し、黙従すればするほど、彼らはわたしを欺くであろうが、大胆な態度をとり、威嚇的な口調を示せば、彼らはただちに従うだろう。そうわたしは思ったのである。〉（同上）

引用19

〈余は断然旗幟を撤して帰国せんのみ。其平和の使臣に代つて来たらんものは、必ず幾隊の軍艦ならん。日本の迷夢を覚醒せんものは、唯砲烟爆雨の外はあらず〉（堀田正睦〈幕末外国関係文書之十八〉）

引用20

〈昨月十七日、下田表え渡来の亜船（※アメリカ船）え、彼国の使者ハリスならびに并通弁の者乗船、神奈川え入津にゅうしんいたし、書翰差出、今度英・仏の軍艦清国の戦に勝、其勢に乗じ、近々弥御国え渡来致し、強訴の企之有る由注進に及び候。〉（〈間部詮勝申上書〉、安政五年十月二十四日、『幕末政治論集』所収、107p）

19. ハリスの〈外交〉の手練手管と本音

→ 江戸登城に際して、江戸城攻略法を考え記録している（引用21）

- 彼が活用した〈アロー号事件〉の立役者の一人は、やがて日本に来る英国二代大使ハリー・パークスだった
- 〈アロー号事件〉が日米条約の成功の背景だったことは、当時の常識だった（横浜の新聞人ジョン・ブラックの証言 引用 2 2）
- 前世紀末の〈日米貿易摩擦〉との共通点
- 日本のシステムを〈遅れたもの〉だとする論調が一貫して見られた
- 日本からは居丈高な要求はそのつど〈黒船〉だという反応を生んだ
- それにもかかわらず、本質的な〈文明差〉はもはや存在しなかった
- したがってたんなる摩擦に終わった
（安保が軍艦であったか否かは後世の判断に任せる）
- いずれにしても木戸や西郷の苦勞が多少ともしのばれる時代ではあった

引用 2 1

〈門（※江戸城の）の通路に小さい建物があって、その正面に半ダースばかりの槍がたてかけている。三名乃至五名の武士がむしろの上に座っていた。大きな門扉には、重そうな蝶番がついており、頭の大きな蹄釘が門扉をなにかば蔽うほど打ってあるので、一見頑丈そうだ。しかし少し注意して見れば、それはみな見せかけで、実質的なものではないことが分かる。扉は松材か、糸杉材で造られており、その蝶番は石のはめこみに埋める代わりに、松材の柱に打ち付けてあるだけである。頭の大きな蹄釘は形だけの見せかけにすぎず、門にそれらを留めておくために、下の方に小さな鋸が打ってある。六ポンドほどの曲射砲一門に火薬をつめただけで、これらの門のすべてを破壊できるだろう。〉（ハリス、同上、下 6 4 p）

引用 2 2

〈天津条約をもたらした英仏軍の成功は、ハリスが条約を結ぶのに、事実助けになった。彼は中国で横暴なやり方をしているこの二国の使節が、同じ行動を日本でも必ず取ると主張して、幕府の恐怖をあおりたてた。こうして、二つの強国と日本との間における調停者として、必要ならば、出来るだけの尽力はしようと約束して、それまで執拗に求めていたものを手に入れたのである。もちろんもう調停の必要はなくなっていた。〉（ジョン・ブラック『ヤング・ジャパン』、1-11 p）

2 0. 〈国際貿易の互惠性〉と、〈軍艦外交〉の現実（ハリス）

- 〈国際貿易〉と〈軍艦外交〉の前提は〈蒸気船の時代〉である（引用 2 3）
- もう一步踏み込めば、〈持っている側〉と〈まだ持っていない側〉の落差が、この時点で最大値を示したことである
- 日本がこの落差を急速に埋める最大の例となった
- いずれにせよ、列強は〈軍艦〉によって、日本に開国を強要する（引用 2 4）

引用 2 3

〈1857年12月12日 わたしは、蒸気の活用によって、世界の情勢が一変したことを語った。日本は鎖国政策を放棄せざるをえないだろう。日本の国民に、その器用さと勤勉さを行使することを赦しさえするならば、日本は遠からずして偉大な、強力な国家となるであろう。〉（ハリス、同上、下—87p）

引用 2 4

〈諸外国は競って強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するだろう。日本は屈服するか、そうでなければ戦争の悲惨に巻き込まれざるをえない。戦争が起きないにしても、絶えず外国の大艦隊の来航に脅かされるに違いない。だからこそ、なんらかの譲歩をするのなら、適当な時期に行う必要がある。云々〉（同上）

2 1. 蒸気船は〈資本の総過程〉の最後のピースだった

- 社会的分業はマニファクチュアで始まっていた
- 資本の本源的蓄積も産業革命により加速していた
- 国際貿易における流通の時間効率は、最後のハードルとなっていた
- このハードル越えを蒸気船が解決した
- 並行して蒸気船軍艦は、植民地の拡張、効率的支配を可能にした
- 拡張された植民地は、高利潤の不平等貿易を介して、列強の世界支配を強化していく
- こうして十九世紀的な〈文明化〉の支配構造が確立された

2 2. 〈軍艦〉に乗った〈文明化〉イデオロギー

- 内的契機は依然として〈革命〉（反革命強権を含む）、〈世界史〉、〈進化〉のパラダイムである
- これに〈陰謀〉（文明化抑止の陰謀）が加わった
- 列強は互いに相手の〈陰険な陰謀〉を疑い続けた（ロッシュとパークスが典型）
- これに加えて、他者性（非・ヨーロッパ集団）が〈反・文明の陰険な集団〉として表象される定型を生む
- しかしこれも、〈革命〉にすでに懐胎していた〈陰謀論〉固執の新しい展開型だと考えることができる

2 3. 通商交渉における陰謀論と自縄自縛の疑心暗鬼（ペリー、ハリス）

- 幕藩体制と〈アンシャン・レジーム〉の等置
- これに根本的な他者性の心象が加わり、独特の〈陰謀まみれの体制〉の観念が成立する

- それ自体病理的な現象（→病理的〈文明化〉イデオロギーの系）
- 日本の役人はすべて嘘つきだ（ペリー、引用 2 5）
- 幕府の密偵制度に対する疑心暗鬼
- 「国民一般は慧眼で快活である」
- 無垢の人民と腐敗した体制の対置（アンシャン・レジームとしての幕府）
- 〈革命〉パラダイムの残響（アメリカでは特にヨーロッパの制度を腐敗した制度と総括するトポスが根強く残存した）
- 〈文明〉における先進的革命家としての軍艦外交家という自己矛盾
- ハリスの猜疑心は極大値を示した（引用 2 6）
- 疑いの目で見れば、すべてが疑わしい。なぜ特許の情報が公開されないのか（それはもちろん、特許の慣習が皆無だから！）（引用 2 7）
- 〈御三家〉は大君の兄弟同然だと聞いていたのに、縁などない！「日本人の嘘は底なしである！」（引用 2 8）
 （〈御三家〉はもちろん家康の三人の息子から始まっている！もう一年間も日本にいて、あなたは何をしていたのだ！え？聖書を読んでいた、賛美歌は毎日曜日……はあ……）
- 「坊主憎けりゃ……」のパターンにはまってしまった、すご腕の外交官
- 〈狡知の為政者〉と〈無垢の民衆〉の弁別（引用 2 9）
- 〈文明化〉の酷薄を知るハリスの本音も交じる

引用 2 5

〈われわれは、高位の日本の役人及び官庁職員が、外国人との協商及び交際に対してしばしば恥知らずにも示した、深く謀んだ虚偽と二枚舌とに言及するだろう。〉（ペリー、同上、1-59 p）

引用 2 6

〈なんとかして真実が回避されうる限り、日本人はけっして真実を語りはしない。そうわたしは考える。率直にほんとうの事を答えればいい時でも、日本人は虚偽を述べることを好む。〉（ハリス、同上、中 2 3 9 p）

引用 2 7

〈合衆国の特許庁から綿に関する種々の情報の提供を依頼する回状を受けとった。……それらをわたしは翻訳して日本人に渡し、必要な情報を提供するように要請した。今日その返書を受けとる。それは、日本人の奸智と狡猾と虚偽の立派な見本である。彼らの大きな目的は、自分の国について知られることを、できるだけ少なくしようとするところにあるらしい。つまるところ、あらゆる詐欺、瞞着、虚言、そして暴力さえもが彼らの目には正

当なのである。この国が、世界中でもっとも情報の入手の困難な国であるのは事実である。統計というものがないし、産業関係の問題をみつかった出版物も一つもない。) (ハリス、同上、中250p)

引用28

〈日本人の嘘は底無しである。わたしはいま、〈大君の三人の兄弟〉は、たんに名義上の兄弟にすぎないことを知った。彼らは大君の親族ではあるが、別家の生まれで、われわれが知るような戸籍上の兄弟ではない。〉 (ハリス、同上、下182p)

引用29

〈見物人の数が増してきた。彼らはみなよく太り、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ富者も貧者もない。これがおそらく人民の本当の幸福の姿というものだろう。わたしは時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果たしてこの人々の普遍的な幸福を増進することになるのかどうか、疑わしくなる。わたしは質素と正直の (!) 黄金時代を、いずれの国におけるよりも、より多く、日本において見いだす。生命と財産の安全、人々の全般的質素と満足は、現在の日本の顕著な姿であるように思われる。 (ハリス、同上、下26p)

24. 幕末維新期の〈文明外交〉の平均的内実

- 彼らは一様に、〈アンシャン・レジーム〉の陰険さと陰謀を相手にしていると観念する
- それは単純な恫喝か、より狡知な陰謀外交かに二項分岐する
- この二項分岐は、ヨーロッパ列強間の〈外交〉の基本だった (そのヒーローとしてのビスマルク)
- ペリー、ハリスの〈文明外交〉の自己矛盾
- 文明の代理人であるはずの彼らは、〈陰険さ〉において幕府を列強なみにあつかった
- この矛盾の起源は〈東洋における交易の難しさ〉の経験蓄積
- エンゲルベルト・ケンペル (1651~1716) 以来の〈情報〉の蓄積
- 彼の遺稿『日本誌』(1727年)は、ペリーの時代まで日本の基礎情報源として使用されていた。その内容は一定の水準に達した博物誌以外は、「いかに日本人はわれわれと違っているか」に焦点を当て続けた、非常に偏頗なものである (同時代の日本理解の史料としての価値はほとんどない)。
- この〈絶対的他者としての日本人〉の固定観念が、〈文明化〉の使徒たちの日本人観をあらかじめ規定してしまった
- その結果、特にペリーやハリスにとっては、幕府は「別の、しかし同程度に複雑に発達した旧体制」と受け取られるようになった

25. 〈絶対他者〉としての日本人

- 〈文明化〉イデオロギーの定番となる固定観念
- 芝居好きの女中を見たオランダ人とオールコックの感嘆（引用30）
- 想像と現実の見分けがつかない、なんて子供だ（！）云々
- 単に芝居好きの女の子が舞台の演技に感動していたにすぎない
- 同じ事がロンドンのシェイクスピア劇場で起きれば、オールコックは〈演劇と文明〉の関係について深く考えたに違いない
- 人間は発見したいものを発見する
- 固定観念に縛られた人間は、ということわり付きで

引用30

〈長崎にいたころ、あるオランダ人が自分の体験としてわたしに話してくれたのだが、彼ら日本人は単純な子供じみた信念でもって、虚構を現実だと信じるのである。このオランダ人が雇っていた一人の若い女が、ある日ひじょうな悲しみと不安の色をみせ、胸も張り裂けんばかりの顔をして泣きながら帰ってきた。「どうしたんだい花、なにごとが起きたんだい？」こう聞くと、花はすすり泣きながら、「とても悲しゅうございます。あの方が殺されてしまったんです」と言う。〉（オールコック、同上、中396p）

26. この〈絶対他者〉性はすでに〈革命〉パラダイム、〈世界史〉パラダイム、〈進化〉パラダイムでそれぞれ準備されていた

- 革命は旧体制と反・革命を〈絶対他者〉化した → ギロチンの跳梁
- ヘーゲルの〈世界史〉は、〈自由なヨーロッパ〉を〈自由でない東洋〉に對置した
- 東洋は近代的自由そのものから疎外されてしまった
- 植民地主義と奴隷制の〈教育的〉自画自賛へ
- 最後に進化論は、〈進化するわれわれ〉を〈進化しない彼ら〉から切り離れた

27. 〈文明化〉イデオロギーは、利己的な動機からの〈交渉〉能力を著しく高める

- 集団的利権の代理人としてのペリー、ハリス、オールコック、パークス、ロッシュ等々の折衝能力、「なんとしても元を取る」能力の高さ

28. 〈文明化〉イデオロギーは、互恵的な動機からの〈交流〉能力を著しく低下させ、場合によっては根絶する

- 上掲オールコックの例

→ パークスも、なにかというと頭ごなしに木戸たちを怒鳴りつけたので、志士の間では非常に評判が悪かった（サトウの証言）

29. 極端な〈交渉〉の才人たちの時代は、幸いにして幕末維新期に集中していた

→ 〈危機〉と〈ハゲタカ〉の関係

→ 明治期になって日本に入ってきた外国人、特に〈御雇外国人〉は、低く見積もっても普通の人々だった。中には著しく〈交流〉の能力に恵まれた真に人間的な人々も含まれていた（ハーン、ベルツ、クラーク等々）

→ ともかくしかし幕末維新の志士たちが向き合ったのは、ハゲタカタイプの〈交渉〉人たちである。その衝撃と初期の対応を確認しておかねばならない（次節）

（近代本論第十四回キーワード終わり）